

「神の家が壊れていく」

ヨハネによる福音書 2章 13～22節

無い教会と書く「無教会」というキリスト教のグループを御存じかと思います。有名な内村 鑑三^{うちむら かんぞう}によって始められたプロテスタントの一教派で、外国には見られない日本独自のグループです。家庭集会的な集まりをまもり、リーダー的な人々を中心に信仰の群れを形づくっています。キリスト教界のみならず、各方面に優れた人材を輩出してきました。丁寧^{ていねい}な聖書の学びに裏づけられ、かつ伝道に熱心なグループで、教えられる点が少なくありません。

しかし それにしても、「無」教会とはやはり、挑発的で衝撃的な名前です。実際、この名前のために、無教会の人たちは必要以上に反発をかってきました。今月の聖書の箇所は「神殿」に関する箇所^{こんにち}で、今日の私たちにとっては、それはすなわち「教会」に関するところと言えるでしょう。ですので、内村が自分たちの群れを「無教会」と呼ぶことでいったい何を言わんとしたのか、そのことに耳を傾けることから 今月の学びを始めることにしたいと思います。内村鑑三はその本の中で、次のように語っています。

もちろん・・・旧新両約聖書とも・・・「民の会合」または「教会」のことについて書きしるしていることは、私^{わたくし}も十分に承知しております。しかしながら・・・今のいわゆる教会なるものが聖書の示す教会であるか、その事はまだ定まりません。・・・キリストならびに使徒らの唱えし教会なるものがけっして今日 [のよな]・・・教会でなかったことは、少しく聖書の研究^{こう}の功を積んだ人の誰にでもわかることであろうと信じます。

その精神が違っております。・・・キリスト教会なるものは、利益のための集合でないことはもちろん、また社会改良、慈善^{しこう}施行のための会合でもありません。キリスト教会は、キリストによりて 聖霊をもって新たに生まれたる者の・・・団体であります。・・・もし キリストの教会を霊的以外のものに解する者がありますれば、その人はまだ、真面目^{まじめ}に新約聖書を研究したことの無い人であると思います。

安息日^{あんそくび}ごとに鏘々^{そうそう}たる鐘の音に導かれて会堂に至り、そこに洋々たる音楽に心を清められ、後は白衣^{のち びやくい}を着けたる教師の口より蜂蜜のごとき説教を聞かざる貴^{あなた}下方のご幸福を、私も時にはおうらやみ申し上げないわけではありません。しかしながら・・・私の見るところをもってしますれば、儀式の無用を説く聖書の言葉は、その有用を説くそれよりもはるかに荘厳で、はるかに偉大であると思います。

内村は生涯を通して様々な人生経路を辿った人物で、その教会観や教会形成についても、細かな点では議論の余地がないわけではありません。ただし、引用の文章からも分かる通り、名前が「無教会」だからといって、教会そのものを否定したわけではありません。無教会もまた「無教会」という名の教会である、ということです。無教会の「無」とは、手の込んだ儀式や組織制度など、教会的団体に付きものの本質を歪めかねない飾りが無い、という意味です。巷の教会の、どこか当然のようにも思われている体が無い、ということです。私自身 無教会に属そうとは思っていませんので、引用した一文についても もちろん、一々の点では異論がないわけではありません。けれども、そこには安易に受け流してはならない問題が置かれており、私たちにとっても 学ぶべきものは決して少なくないように思われています。内村は別のところで、「教会と信仰」と題して、こうも語っています。

信仰・・・[が] 教会を作る [のである]。教会を作らんと焦心する者の教会は衰え、信仰を説く熱心より教会のことを省みるの暇なき者の教会は盛ゆ。これ事実なり。

このようにして、教会は人の手で飾り立てた単なる組織や団体ではなく 信仰の群れであるから、その大本は「信仰」であって、しかもその信仰は「聖書」の御言葉に聴くことから来る、と 内村鑑三はそう強調し続けたのでした。教派こそ違うものの、心すべき大切な点をこの私たちにも教えてくれているように思います。

今月の聖書の箇所に出てくるイエス・キリストの姿は、私たちが日ごろ抱いている主イエスのイメージとは大きく異なります。私たちが通常抱くイエス・キリストのイメージは、可愛らしい小羊を腕に抱いて羊の群れを導く優しい羊飼いとといった、古今の聖画によく見られるようなものではないでしょうか。その意味では、私たちが今目の当たりにしている主イエスの姿は、どこか異様にさえ映ります。ですが、私たちが繰り返し留意せねばならないのは、イエス・キリストを知るというのは すなわち、聖書が記すそれを知る、ということではないか。自分の好みに合わせてイメージした創作のイエス・キリストに聴く、ということではないと思います。私たちはあくまでも聖書に密着し、好みや思わくを脇にやって、そこでイエス・キリストに目を据える、ということです。『キリストに倣いて』という本があります。トマス・ア・ケンピスという人の書いた本ですが、聖書に次いで愛読されてきたと言われる 信仰的な黙想の名著です。キリスト教の信仰を求めるとして、人間的な言い方にはなりますが、その目指すところを一言で言い表わすとすれば、それはまさに この書名の通り、「キリストのようになること」ではないでしょうか。使徒パウロの言い方に従えば、「キリストが・・・内に形づくられる」（ガラテヤ 4：19）ことです。しかも、他の何ものでもない、聖書の語るキリストが形づくられることです。だとするならば、今回 聖書が差し出している、一見異様にも見える 憤りに荒々しく燃えるキリストもまた、私たちが見上げて従わねばならない信仰の主と言わざるをえません。

つまり、聖書が記すイエス・キリストは、何があってもいつもニコニコしている、ただ優しいだけのお方ではないということなのでしょう。誰がどう読んでも否定できない、主イエスの一つの事実があります。それは、信仰の中身を置き忘れ、偽善と外側の飾りに囚われた当時のユダヤ教の指導者たちに、主イエスが一貫して立ち向かわれたということです。その意味で、イエス・キリストは間違いなく、憤りの人でした。問題は、何に憤られたのか、ではないでしょうか。

時は、年に一度の過越祭間近の時でした（13）。ユダヤの3大祭りの一つで、旧約聖書の時代にイスラエルの民が奴隷のエジプトから脱出したのを記念して、毎年もたれるものです。エルサレムの近郊約30キロ以内に住むユダヤ人の成人男性はすべて、祭りに参加することが律法で義務づけられていました。それだけではありません。世界中に散らばったユダヤ人が、そこかしこからエルサレムに集まりました。その数は数十万に上り、時には百万単位になることもあったと言われています。

そして、場所は神殿の境内でした（14）。そこでは、商人たちが「牛や羊や鳩を売って」（14）いました。犠牲の献げ物に使う動物でした。遠くから来る人々にとって、動物を連れてくることは困難だったからです。そうした人々のため、動物を手に入れる手近な場所が必要でした。ただし、神殿の外で買った動物は、それらが傷のない清く完全なものか、入り口でチェックするシステムが作られていました。しかも、チェック料付きです。そこでチェックに引っかかった場合、その動物は持ち込みを拒否され、境内で改めて犠牲の動物を買い直さなければなりません。実際は、そのようにすることで事実上、犠牲の動物を境内で買わねばならない仕組みにしていたのです。そのうえ、境内では外の倍近い値段で動物が売られていました。このようにして、神殿の境内が商人たちの格好の儲け場所とされていたのです。本来の務めを蔑ろにした宗教が作り出した、エゴと欲得のシステムです。

神殿の境内にはまた、両替人もいました。神殿税を納めたり、献金をしたりする場合、特定の硬貨でだけそうすることが許されていたからです。当時ユダヤでは、日常生活に関しては、パレスチナに流通する硬貨のすべてが有効でした。しかし、外国の硬貨はほぼ例外なく、皇帝の肖像や異教のシンボルが表面に刻まれていました。このため、日常の通貨としては認められたものの、神殿での使用は、汚れていて清くないとの理由から許可されませんでした。さらに、学者によっては、別の見解を採る人たちもいます。すなわち、特定の硬貨に限定したのは、国や場所によって金や銀など希少金属の含有量の好い加減なものが少なくなかったため、硬貨の質を一定にするためだった、というのです。それらの学者によれば、「神殿の関係者は硬貨をすべて溶かして、金属の塊にした。だから、彼らにとっては、硬貨の表面に何が刻まれていようと実のところ、どうでもよかった。問題は硬貨の値打ちだったのだ」といいます。どちらが事実か、定かではありません。が、いずれにせよ、世界各地からエルサレムの神殿に来る者たちは定められた特定の硬貨に両替せねばならず、そのため、両替屋が神殿の境内で商いをしていたのです。しかも、ここでもまた、暴利が貪られていました。例えば、両替料として高い手数料を取ったうえ、釣り銭料としてもう一度高い手数料を取る、といった具合です。エゴと欲得のシステムの二段重ねです。

こうして、神殿それ自体が各種の商売人に儲けの場所を用意。そして、その彼らと結託し、あれやこれやの仕方で多額の富を蓄えていたと言われます。実際、紀元前 54 年にクラッススというローマ帝国の将軍がエルサレムを占領したとき、神殿から現在の額で 20 億円にも及ぶ蓄財を奪ったとも伝えられています。さらには、「それでも、それがすべてではなかった」と語る学者さえいるほどです。イエス・キリストが神殿に赴かれたときその目に入ったのは、信心という美辞麗句のスローガンの裏で儲け主義が蔓延る、エゴと欲得の有り様でした。

主イエスは、私たちが愛おしんでくださいます。私たちのために生き、そして死なれたとは、私たちが御自身の命としてくださった、ということではないでしょうか。イエス・キリストがこの世に生きられたのは、自らのすべてを懸けてそのことを伝えるためでした。その私たちが真実のいのちを得るのは、どこからか。父なる神からである、と聖書は一貫して語ります。しかるべきいのちをしかるべきところから頂いて、私たちは初めて、それぞれにあるべき人生を歩むことができるのではないのでしょうか。主イエスは、そのことを御存じでした。そして、神の下さるそのいのちは何よりもまず、神を礼拝することから来ることも御存じでした。その礼拝を行なうのがほかでもない、神殿でした。なのに、「そのはずの神殿が今、エゴと欲得の家になっている」。主イエスの内に抑えがたい憤りが沸き上がります。15 節、「イエスは縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し」、そして 16 節、「鳩を売る者たちに言われた。『このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない』」。「宮清め」と呼ばれる場面です。信仰の場をなし崩しにするエゴと欲得のただ中に、鞭を手にして立たれる主イエスのお姿が浮かび上がります。独り、威厳をもって佇まれる姿です。それは、神を愛され、私たちが愛され、それゆえ神と私たちが繋ぐ礼拝の場を愛される、そのような激しいまでの愛のお姿です。憤りとなってほとぼしるほどの、激しい熱情です。それゆえの義憤であり、本来あるべき有り様を希求するお姿です。

灰谷健次郎という作家がおられます。13 年前に亡くなりましたが、その灰谷さんの代表作である『兎の眼』に次のような一節があります。生徒指導の問題をめぐって、小学校の教師会で侃々諤々の議論がなされるなか、校長先生と教師が交わすやり取りです。

「わたしは この学校をできるだけ民主的に運営するべく努力してきました。みなさんの発言を尊重して、できるだけ わたし自身の意見はのべずに・・・」

「そやから あかんのや」と また足立先生がヤジった。

国や文化を問わず、私たちは概して、「面倒を招くことは避けたい」「何はともあれ、平穏・平和が第一」と、事を荒立てない安全策を大切にする傾向があるようです。議論を避け、摩擦を和らげることに意を配る。柔らかな言い回しや物腰で、場に角が立たないようにする。そうした、いわゆる潤滑油の文化です。もちろん、社会生活に潤滑油が必要なことは言うまでもありません。潤

滑油ゼロでは、どうでもいいことまでギスギスしてしまいます。けれども、その一方でまた、ただ形ばかりの平穏や平和を求めるあまり、物事の核心に触れる事柄までナアナアで済ませてしまう。生き方の根っこに関わる事柄まで、キチンと語り合うことなく、その場しのぎの事なかれ主義で終わらせてしまう。もしそのようなことがあるとしたら、はたしてどうでしょうか。事のいのちに関わるものまで、次第に失われてゆくように思われます。一番大事なところまで変質してしまい、ついには壊れてしまうのではないのでしょうか。「そやから あかんのや」と言った足立先生の一言^{ひとこと}は、そのことを示唆するものです。同様のことを、「対話のない衝突はあっても、広い意味で 衝突のない対話はない」と、そのような言い方で表現している人もいます。どうでもいいことは、どうでもかまわない。大らかに悠長^{ゆうちょう}に、楽しく、文字どおり好い加減^{い かげん}にやるのが一番でしょう。しかし、事の生死を左右するような本当に大切な事柄まで その場しのぎのあれこれで済ませていると、知らずのうち^{むしば}に いのちそのものが蝕まれ、取り返しのつかない状況に陥ってしまうかもしれません。ちなみに、「夫婦特集」を組んだ雑誌の広告に こんな言葉が記されていました。「夫婦なんて、そんなもんじゃない？ 付かず離れず、空気みたいな・・・。長持ちさせるコツはそこよ、そこ」。よく聞く処世の術の一つと言えるのですが、私には なんとも寂しい言葉に響きました。そこでこのテーマは「夫婦の関係」でしたが、が実のところ、それは夫婦の間だけに限られたことではない。私たちの社会の空気全般を象徴している言葉のようにも感じられるのですが、いかがでしょうか。形ばかりの平穏と引き換えに、触れねばならない大切なことに触れないとしたら・・・。その結果、本来の^{はつらつ} 激刺とした生気が失われていくとしたら・・・。いのちが^か 涸れていく、そんな空気です。教会まで そんなふうにはなりたくない、そんなふうにはしたくない、と思います。

イエス・キリストがその柔和さを後ろにやり、鞭を手にするほどに憤りを露わにされたのは、まさにこの故でした。私たちが愛されるがゆえに、神と私たちが繋いで 私たちにいのちを注ぎ込む礼拝を愛される。その礼拝の場をなし崩しにして 礼拝を内実の損なわれた形ばかりのものにする、人々のそのエゴと欲得を良しとされたい。主イエスの姿は、この愛に基づく憤りのそれと言えるでしょう。保身やエゴとは無縁の、それらと全く反対の側にある、神と私たちが愛されるがゆえのお姿です。イエス・キリストのこの姿を^ま 目の^あ 当たりにして、こう語った人がいました。「この時代の最大の過ちの一つは、真っ当な憤りを忘れてしまったことである」。言うまでもなく、聖書は一度ならず、寛容の心を持つようにと説いています。裁き合い、傷つけ合うことばかりの私たち・人間の社会において、寛容であることは間違いなく大切なものです。しかしながら、それは、物事の土台をなし崩しにしてしまうものまでそのまま丸呑みにして 事を荒立てないように、というものではないでしょう。「私たちには曲げてならないものがあり、歪めてはならないものがある。壊してならないものがあり、失ってはならないものがある。それら忘れてならないものをしっかりと見据え、そこで確かないのちを頂いて、そして心豊かに、心温かく人々に向かう」。それが、全体として聖書の説くメッセージではないのでしょうか。私たちは頂かねばならないものを頂いて初めて、豊かにされ、そして 心温かな人間とされるからです。聖書を自分の好みで薄っぺらに読むことのないよう、心したいと思わされています。

こうして、神殿のただ中で「宮清め」の事件が起こされました。暴利を貪る不正のただ中で、主イエスの憤りが発せられました。正義と公平を旨とすべき信仰の神殿に悪徳が蔓延り、不正の輩が幅を利かせている。そんな現実を見せられたのです。主イエスの尋常でない厳しい態度も、当然といえば当然ではないでしょうか。ところが、です。ところが、ここで一つの興味深い事実気づかされます。それは、ヨハネの福音書の場面の描き方が、注意して見ると分かるのですが、他の3つの福音書と違っていることです。ヨハネは、他の福音書とは微妙に異なる表現でイエス・キリストの言葉を記しています。すなわち、マタイ、マルコ、ルカの3つの福音書がいずれも「あなたたちは、祈りの家を強盗の巣にしてしまった」(マタイ 21:13、マルコ 11:17、ルカ 19:46)と語るところを、ヨハネによる福音書は「わたしの父の家を商売の家としてはならない」と書き留めているのです。大まかに見れば、さほど違わないようにも思える言い回しです。しかしながら、目を凝らしてよく見てみると、微妙な違いながらも、ヨハネはここでイエス・キリストの思いをより深く読み取っているのではないかと、思われます。主イエスの思いの在り処を、ヨハネはいま一つ本質的に、より鋭く看取しているように感じられます。神殿を「強盗の巣」にすること、つまり悪辣なやり方で商売をし、神殿を強欲な不正の館にするのが悪いのは言うまでもありません。しかし、ヨハネは「強盗の巣」とは言いません。単に「商売の家」と記しています。それは、いったい、何を意味しているのでしょうか。それは、ヨハネが主イエスの言葉の内に商売の仕方だけでなく、商売そのものの問題性を読み取っている、ということではないでしょうか。イエス・キリストは商売にまつわる不正云々を超えて、それ以前のこととして、またそれを生み出す根っこの事柄として、商売人がそこにいることそのものを問題視された。ヨハネは、主イエスの言葉を、もう一段深いところでそう受け取ったのだらうと思います。言い換えれば、礼拝というものに対する姿勢がそもそも問われている、ということです。礼拝をどのように受け止め、それにどう向かうのか。商売人の不正も、それを巧みに仕組んで利用する神殿関係者の貪りも、それらの根は突き詰めれば、神殿における礼拝の受け止め方に起因している。その姿勢の緩さと偽りから来ている。ヨハネはそのような真意を、イエス・キリストの言葉の内に聴き取ったのではないのでしょうか。

例えば、分かりやすい一例として、ヨハネが記す動物の売り買いと両替の問題を考えてみると、どうでしょうか。動物の売り買いも両替も たしかに、当時の宗教的慣習からして一概に否定できるものではなく、必要な側面があったと考えられます。それも、手近で便利な場所でなければ、面倒でしかたありません。たしかに、そのとおりでしょう。けれども、まさにここに落とし穴があったと言えます。手近さ、便利さ、気安さという落とし穴です。そもそも、売り買いの場所はなぜ、神殿の境内でなければいけなかったのでしょうか。また、両替の場所もなぜ、神殿の外ではいけなかったのでしょうか。実際、どちらも境内の中でなければならぬという理由など、どこにもありませんでした。ただ、外よりちょっとでも中のほうが便利だった。そして、それを上手巧みに使って、自らの利を肥やす人と仕組みとがその背後にあった。これが、境内に店が設けられるようになった経緯でした。商人はこうして、境内の一番最初の庭である「異邦人の庭」に店を構えたのでした。そして、その結

果、一つの不祥事が生じるところとなります。すなわち、神殿はそうすることで、真の神を求めてわざわざやってきた異邦の人々の場所を、つまり今日の私たちの状況に置き換えて言えば、信仰を求め意を決して教会の門を叩かれた求道の方々の場所を、心の掻き乱された騒々しい場所にしてしまったのです。こうして、神殿はその入り口の第一歩から、礼拝の心から離れた場所となりました。動物の鳴き声と商売人の掛け声で覆われていました。そして、その裏に潜む人々の私利欲得。それは、神殿の掘って立つ土台をなし崩しにするものでした。教会の掘って立つ基をなし崩しにするものです。

問題の根は、不正の底に深く強かに潜む人間の欲得と、それに利用され、また時にそれと与もする便利で都合のいい信仰にあると言えるでしょう。つまりは、礼拝の心を忘れた、自分好みの気安い信仰です。日常の卑近な例を挙げるなら、私たちの属するバプテストの教会は聖書の学びの重要性を説く一方、信徒の働きの大切さも強調します。ところが、活動に力が入るあまり、あれこれ問題が生じてきました。その一つに、「うどん問題」という、少なからぬ教会が経験してきた問題があります。どういうことかという、バプテストの教会では、交わりを深めたり午後のプログラムに備えたりするため、礼拝の後昼食を共にするところが少なくありません。うどんについても、当初の目的はこうしたものでした。「うどん問題」と呼ぶのは、うどんはお湯で温めてつゆをかければ簡単に出来上がることから、昼食にうどんを出すところが多かったためです。それで何が問題かという、時とともに当初の意図をどこかに置き忘れ、うどんの準備に心を奪われてしまったことです。礼拝中もそわそわ、そわそわ。火にかけたお鍋を見にいたり、当番同士で連絡を取り合ったり。頭の中は、うどんदैっぱいです。果ては、うどん当番は礼拝に出ないで、キッチンで昼食の準備をしてもいい、という教会まで出るしまつです。礼拝を横目に、キッチンで井戸端会議を楽しむ人たちもいます。説教を聴くより、お喋りをするほうが気楽で楽しいのでしょう。こうして、礼拝の心を忘れ、教会が神の語りかけを聴く場所でなくなるところが出てきたのです。私自身、「礼拝の妨げになるなら、やめたほうがいい」と言って、嫌われたこともあります。最近では反省のためか、仕込みの要らない食事でこれに代える教会も出ているようです。それはそれとして、問題の所在は、どこかしら都合のいい便利で気安い信仰が染み入り、礼拝の場をなし崩しにしてしまうことです。事は言うまでもなく、うどんだけの問題ではありません。教会が行なうプログラムや活動には、愛餐会や交わりにも、クリスマス会やバザーにも、おしなべて同じような誘惑や危険性が潜んでいるように思われます。神殿での商慣習とは違って、そこに悪巧みや不正があることはないにしても・・・。どれもが本来は、信仰を豊かに膨らます良いもので、生かして用いられるべきものではあるものの・・・。そうであったにしてもしかし、すべての源泉である礼拝の心を忘れるとき、それらもまた、逆に信仰を蝕んで歪めるものにさえなりかねないのでは、とそう思われています。

要は、礼拝の姿勢であり、その心です。礼拝は時に、祈りや讃美など、私たちの側で何事かをする事、と思ひ込むことがあります。しかしながら、礼拝とは、旧約の時代からそもそも「腰を屈めて仕えること」を意味しました。日本語でも「恭しく拜する」という意味合いの表現であり、英語でも「崇め仕える (worship service)」と書き表わします。そのように、礼拝とは一義的には、

まずもって平伏^{ひれふ}して 向こうからの言葉を待つこと、と言えるのではないのでしょうか。語弊^{ごへい}もあるかもしれませんが、水戸黄門^{みとこうもん いんろう}の印籠^{いんろう}を前にして、額^{こす}を地面に擦りつけ、平伏して拝するあの姿と、どこか似通った印象でしょうか。黄門様からの言葉を待って、「ハハー」と額^{ぬか}ずく、あの姿です。もちろん、説教者の言葉をそのように絶対化するというものではありません。そうではなく、私たちがまもる礼拝では、聖書の言葉に向かう私たちの姿勢^あの有り様^{よう}が問われ、礼拝に臨む私たちの心の内実が問われている、ということです。イエス・キリストは私たちのために命を懸け、御自身のすべてを献げてくださいました。礼拝は、その主イエスの前に額^{こす}ずくときです。私たちに御自身を与えてくださった その主イエスを前にして、どうして 気安く気楽にいられるのでしょうか。ましてや、計算や誤魔化^{ごまか}しや駆け引きや偽りなどといった 悪意の不正な思わくなど、そこで生まれようはずがありません。それは、尊いものに響く心を失った姿ではないのでしょうか。私たちは そのようにして、尊び崇める尊崇^{そんすう}の姿勢のもと、畏れ敬^{おそ うやま}う畏敬の心をもって、主イエスの父なる神を礼拝するのです。

物事には やはり、悪しくあってはならないことがあると思います。さらには、軽く扱ってはならない、気安く対してはならないものもあるように思われます。ですから、礼拝という場において 恵みの神とその御子^{みこ}の語りかけに不誠実に適当に向き合う、そうした在り方には心して注意したいと思われています。イエス・キリストの真実^{ほんとう}を冒瀆^{ぼうとく}することにもなりかねないからです。

今月の聖書の箇所には、衝撃的な言葉が記されています。19 節の、イエス・キリストの言葉です。主イエスは言われます。「この神殿を壊してみよ」。なぜ衝撃的なのか。それは、この言葉が 主イエスを問い詰める当のユダヤ人たちに向かって言われた言葉だからです。イエス・キリストの言われる神殿とは、皆が集まっている、目に見える神殿のことではありません。目の前の神殿を言われたのなら、続けて「三日で建て直してみせる」などとおっしゃるわけがありません。主イエスが意味されたのは 実は、2つのことでした。

一つは「内なる神殿」で、すなわち、私たちの内なる内的な礼拝の場がそれです。それが実は、第一のことと思われます。その内なる礼拝の場を壊してみよ、と言われるのです。そして、実のところ、それはこれから壊すのではなく、「もうすでに壊れているではないか」と問いかけておられる。「神殿が壊れていく。神の家が壊れていく。礼拝の心が壊れていく。外からの力によってではない。内に巣くう不正と気安さとからであり、偽りと心の緩みとからだ」。口にされた言葉の裏で、イエス・キリストはそうおっしゃっておられるのだろうと思います。信心深さを自負する そのユダヤ人たちに向かって、「あなたがたの内なる礼拝の場は すでに壊れているではないか」と言われたのです。

物事が形を整え、組織や制度がそれなりに出来上がると、そこに始まるのは何でしょうか。内側の精神が形だけのものになり、中身の希薄な空洞が広がることです。信仰も例外でないのではないのでしょうか。宗教が形を整え、組織や制度がそれなりに出来ると、信仰の中身が薄れ、どこかに置き去りにされていく。そして、聖書の礼拝に先んじて、お楽しみや文化や教養の活動主義が求められるようになりかねません。しかしながら、私たちが求めるのは文化や教養としての宗教でもなければ、外

側のあれこれで形を整えるだけの信仰的装いでもありません。私たちにいのちをくれるのは、中身です。礼拝の場に臨まれ、内に語りかけ、働きかけてくださるイエス・キリストです。その生ける主を求める、私たちの内なる心ではないでしょうか。

そして、あと一つ。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と主イエスが言われた もう一つの意味合いとは、ヨハネ自身が 21 節で説明しているとおりで。すなわち、主イエス御自身の体が神殿である、ということです。つまり、イエス・キリストは「私を殺してみよ」と、そう言われたのでした。そして、続けられます。「三日で建て直してみせる」。「3 日で復活する」との約束です。

信仰を形だけのものにするのではなく、生きたものとするには、この復活の主を内に頂くことが必要なのではないのでしょうか。私たちの内なる神殿にいのちを注いでくれるのはイエス・キリストの恵みであり、壊れた神殿を回復してくれるのは主イエスの下さるいのちだからです。私たちは繰り返し、この原点に立ち戻ることを求められているように思います。教会もまた、組織や制度だけのプログラム宗教に陥らないよう、この生けるキリストを礼拝の中心に頂き続けることではないのでしょうか。そのようにして初めて、教会は真実 キリストのそれとなり、その活動も 礼拝へと向かう豊かなものにされると思われます。

ヨハネの福音書は、その編集作業を経て、このような宮清めの出来事を本文の書き出しの直後に置きました。すなわち イエス・キリストの公然たる公の宣教の初めとして、これを配したのでした。福音書編纂の頃は、紀元の 90 年代。外的には占領統治強化のローマ帝国から、内的には律法教育強化のユダヤ教からと、国内外の双方から、教会への圧力がさらにも激化していたときでした。そうしたなか、ヨハネの教会は 教会の内と外とに向け、自らの信仰のアイデンティティーと教会の拠って立つ基盤を確たるものにする必要に迫られました。それはまさに、彼らの生命線にほかならなかったからです。そのようにして、宮清めを事の初めに配したヨハネの福音書が語ること。それが、今月の学びの中心のように思われます。心を注いで礼拝に臨み、生けるキリストから そのいのちを頂くこと。そのような真摯な礼拝を基にして、信仰の教会を建てること。実際、すべてはここから始まるのだらうと思います。ヨハネの語りかけは極めて今日的であり、また実に、この自分的事柄のように響いてきます。

〔祈り〕

愛する神様。

感謝をいたします。御子イエス・キリストは御自身のすべてを懸け、あなたの家を回復してくださいました。御自身のすべてを献げて、私たちがあなたと見える場所を回復してくださいました。私たちのいのちがそこに懸かっているからです。

願わくは、教会に集う一人ひとりに、礼拝のたびごとに、あなたの家に憩う喜びと平安をお与えください。あなたの語りかけをさやかに聴き取り、そこに伴われるあなた御自身に触れることができる

わたしの心に・・・

よう、あなたに向かう心を澄んだ 真つすぐなものとしてくださいますように。そして、教会を真実あなたの教会とするため、集う私たちの思いを一つにし、御子にあつて良き交わりを深めることができるよう、上より豊かな導きをお与えください。

感謝し、主イエス・キリストの御名^{みな}によって願い、お祈りいたします。

アーメン